I am Jazz!（ジャズ・スーパー列伝）

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol. 31
Oscar Perterson【オスカー・ピーターソン】
～“鍵盤の皇帝”と称された名ジャズ・ピアニスト～

Photo by Tom Marcello

Profile

1925 年 8 月 15 日、カナダ・ケベック州モントリオールで生まれる。本名は Oscar Emmanuel Peterson。5 歳の時からアマチュアのピアニスト兼トランペッターだった父親からピアノとトランペットを習い始めるが、7 歳の時に結核にかかり、ピアノに専念。アート・テイタムやナット・キング・コール等から影響を受け、14 歳の時に地元のアマチュア音楽コンテストで入賞。44 年頃からジョニー・ホームズ・オーケストラのピアニストとして、地元のラジオ局に出演し活躍。45 年、20 歳の時に RCA よりレコーディング・デビューを果たす。その後 49 年に、アート・テイタム、エロール・ガーナーやナット・キング・コールのスタイルを合わせたようなピーターソンのピアノを耳にしたノーマン・グランツの目にとまり、JATP（ジャズ･アット･ザ･フィルハーモニック）の一員となり、カーネギー･ホールにてアメリカ進出を果たす。52 年にはレイ・ブラウン (b)、アービング・アシュビー (g) と自己のトリオを結成し、数多くのレコーディングを行う。後にトリオのギターはバーニー・ケッセル～ハーブ・エリスと替わり、更にギターからドラムのエド・シグペンと替わっていったが、常にトリオでの演奏を意識し、個々の演奏者を最大限に引き立たせる才能は突出していた。93 年に脳梗塞で倒れ､リハビリのため第一線を退いていたが、96 年にパリとニューヨークでコンサートを行い復活を果たす 。生涯 200 以上のレコーディングを行い､8 度のグラミー賞受賞、99 年第 11 回高松宮殿下記念世界文化賞受賞をはじめ、数々の賞を受賞。53 年の初来日以降来日回数も多く、親日家としても知られていた 。2007 年 12 月 23 日、腎不全のためカナダ・トロント郊外のミシサガ市の自宅で死去。享年 82 歳。

OP's Great Album

以下で紹介したアルバム以外にも、名盤と称される数多くのリーダー作品を残しているオスカー・ピーターソン。特にトリオでの名盤が多いが、いろいろと聴き比べて欲しい。

レオナルド・バーンスタインの名曲をピーターソンのトリオで奏でた名作

ウエスト・サイド・ストーリー
オスカー・ピーターソン・トリオ
（ユニバーサル・ミュージック：UCCU-6132）

オスカー・ピーターソン（p）
レイ・ブラウン（b）
エド・シグペン（ds）

1. 何か起こりそう 2. 恋は永遠に
3. ジェット・ソング 4. トゥナイト 5. マリア
6. アイ・フィール・プリティ 7. 繰り返し

1957 年に初演されたブロードウェイ・ミュージカルで、1961 年には映画化もされて大ヒットした『ウエスト・サイド物語』。このミュージカルの音楽を手掛けたのはニューヨーク・フィルのコンサート・マスターであったレナード・バーンスタイン。このアルバムは映画公開の翌年 1962 年に録音されたピーターソン・トリオによる作品で、バーンスタイン作曲の原曲の美しさを、メロディックに極上のジャズ・アレンジで聴かせてくれる。

オスカー・ピーターソン最大のベストセラー＆ジャズ史に輝く名盤

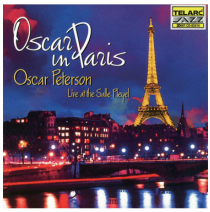
プリーズ・リクエスト
オスカー・ピーターソン・トリオ
（ユニバーサル・ミュージック：UCCU-6004）

オスカー・ピーターソン（p）
レイ・ブラウン（b）
エド・シグペン（ds）

1. コルコヴァード 2. 酒とバラの日々 3. マイ・ワン・アンド・オンリー・ラヴ 4. ピープル 5. ジョーンズ嬢に会ったかい？（他、全 10 曲）

録音の良さ、演奏の質共に最高のアルバムで、ベースにレイ・ブラウン、ドラムにエド・シグペンを従えたピーターソン・トリオが 1964 年に録音した人気盤。繊細なピアノ・タッチ、躍動感あるベースと軽快なリム・ショット＆ブラシ・ワークとの絶妙な絡みが最高の 1 曲目「コルコバード」から曲毎に広がるピーターソンのピアノ・トリオ・ワールドが全開。料理に例えるならば、正に最高の一品！　ジャズ史に輝く名盤のひとつ。

病を克服して見事復活を果たしたオスカー・ピーターソンのライヴ盤



オスカー・ピーターソン・ライブ・イン・パリ
オスカー・ピーターソン
（ユニバーサル・ミュージック：PHCD-1560）

オスカー・ピーターソン（p）、ローン・ロフスキー（g）、ニールス・ペデルセン（b）、マーティン・ドリュー（ds）

[Disc-1] 1. フォーリング・イン・ラヴ 2. ナイト・タイム 3. トランキリー（他、全 6 曲）[Disc-2] 1. ケリーズ・ブルース（他、全 6 曲）

1993 年に脳梗塞で倒れた後、約 3 年間のブランクを経て、1996 年 6 月にパリの「サル・プレイエル」で実況録音されたピーターソンの復活ライヴ 2 枚組。ドリューのドラム・ソロからペデルセンのベース、ロフスキーのギターが加わり、大きな拍手と歓声の中ピーターソンが登場しピアノが流れるという、臨場感溢れるオープニングで幕を開ける。左手麻痺による後遺症を感じさせないピーターソンの好演に感動の全 12 曲。

上原ひろみとオスカー・ピーターソン

現在、世界中で活躍するジャズ・ピアニストの上原ひろみにとっても特別な存在だったオスカー・ピーターソン。本誌 Vol.13 のインタビューに登場してもらった時はピーターソンが亡くなって 4 ヶ月後で、『常に長く会っていた人で、自分の中で本当に憧れの人、伝説の人だったので、本当に実感がなくて…（カナダ大使館で行なわれたトリビュート・コンサートで）私も 3 曲弾いたんですけど、オスカーの奥さんから「トリビュート・コンサートをしてくれてありがとう！」っていう手紙を見た時に涙が止まらなくて、MC もボロボロでした。』と語っている。

歌うオスカー・ピーターソン

“ 鍵盤の皇帝 ” と称された名ジャズ・ピアニストのオスカー・ピーターソンだが、貴重なピーターソンの歌声が聴けるアルバムが 2 枚残されている。『ロマンス』（1952~54 年録音）、『ウィズ・リスペクト・トゥ・ナット』（1965 年録音）というアルバムで、『ウィズ・リスペクト・トゥ・ナット』は尊敬するナット・キング・コールの死の直後にトリオとビッグバンド編成でレコーディングされた作品。ナット・キング・コールの十八番をピーターソンが歌っているが、歌声も節回しもナット・キング・コールにそっくりで、実に甘く素晴らしい歌声を披露してくれている。

Jazz Standards（ジャズ名曲列伝） Vol.4

~ If I Should Lose You【イフ・アイ・シュッド・ルーズ・ユー】~

この曲は『蝶々夫人』を書いたデーヴィッド・ベラスコ原作のオペラで、1936 年のミュージカル映画『ロジータ（原題：Rose Of The Rancho）』のために書かれたナンバー。作詞はレオ・ロビン、作曲はラルフ・レインジャーが手掛けた。哀愁漂う名バラードとして親しまれ続け、数多くのアーティストに取り上げられている。キース・ジャレット・トリオやハンク・モブレーの名演が有名だが、チェット・ベイカー＆アート・ペッパーの名演もお薦め。

★ この名曲が聴けるお薦めのアルバム

チャーリー・パーカー『ウィズ・ストリングス』
ジョージ・シアリング『ブラック・サテン』
チェット・ベイカー＆アート・ペッパー『ザ・ルート』
ハンク・モブレー『ソウル・ステーション』
キース・ジャレット・トリオ『スタンダーズ Vol.2』